

卷 頭 言

土木報國は畢竟社會、國家に對する土木技術の寄與であり奉仕である。然れども技術は單に技術の爲の技術ではなく手段の爲の手段では更にない。特に土木の技術は總て應用であり利用であり、厚生であり更に進んで土木事業は國民生活及國家活動の礎石たるべきものである。されば此れを司る者其れに携はる者すべて良く社會の動向と國家の赴く所とを洞察し過誤なからん事を庶幾しなければならぬ。

依つて技術家に有勝と言はるる偏見霞の膺より天井を覗く態の狹見は心せねばならぬ點事柄である。今次の高等官技術試験に於ても社會常織の欠隙が顯著なる現象として指摘せらるるを見ても這般の通幣を物語つてゐるものである。繁忙に事よせての不勉強に警鐘を鳴し常織涵養の急務を叫ばんとするものである。

科學者は觀察力の秀でたるを以て誇りとし、誠實に思考するを以て優なりとする。我等の「心構へ」の根底は意織するとせざるとに不關ず既に出來てゐる。只此れに社會現象の映像を寫しこれを咀嚼する事によつて自らの天職をして點睛の實を得せしむる事が出来るのである。